

「泣き声のとなりに、光があった」

岐阜高山教務所 書記 木越 遥

今日もまた、眠れない夜。

腕の中で泣きじゃくるわが子を、何度も何度も抱きなおして、やっと眠ったと思ったら

すぐにまた、泣き声。もう何時間経ったかもわからない。

時計を見るのも怖くなって、暗い部屋の中、ただ揺れながら過ごす。

こんなにも愛しているのに、こんなにも尽くしているのに、なんでこんなに苦しいんだろう。「なんで泣き止まないの」「もう、これ以上どうしたらいいの」「何が間違いなの」

心の中で何度も思った。疲れと、焦りと、眠気で、もう自分がどこにいるのかもわからなくなる。夢なのか、現実なのか、生きているのかさえ、わからなくなる。

でも、ある夜ふとした時に、わが子の泣き顔から、あたたかな光が見えた気がした。

私の頼りない腕の中で、この子は全身で「生きたい」って叫んでる。泣くことしかできない命が、それでも必死に、世界にしがみついている。

それを私は、ただただ、受け止めている。

できることは少ない。泣き止まない日もある。イライラもしてしまうし、「もう無理」って思う日もある。そんな私だけど、側にいることだけはやめなかった。

それって、仏さまのまなざしと、光と、同じだと思った。

浄土真宗では、どれだけ煩惱にまみれて、どうしようもない自分でも、「見捨てない」「見限らない」って、ずっとそばにいるって言ってくださっている仏さまがいる。

自分の努力や正しさで救われるんじゃない。本当の救いは、「こんな自分でも抱かれている」って気づかせてもらったときに、そっとやってくる。

それは、生まれてわずか 8 カ月の、わが子の泣き声のとなりにあった。真夜中の、誰も見ていない場所で、私は気づかされた。

「泣き止ませること」が正解じゃない。「そばにいること」こそが、何よりの証。

たとえ出口が見えない長い、暗い夜でも、光は、もう届いていた。私が気付く、ずっとずっと前から。

わが子の命を通して、仏さまが私に教えてくれていた。

「そのままのあなたで、よく頑張っているよ」って。心の闇がスッと消えた。

まるで貴方に「そのまま、いいんだよ」って言われたかのよう。

今日もまた、眠れない夜。

「もう無理」って思いながらも、今日もこの腕は、ちゃんと動いた。

暗闇の中で泣くこの子を、また優しく包みこめた。

何者でもない、ただ、人であるだけの私が、今日も小さく尊い命を守っていく。

しんどい夜の中で、貴方に許された私が、今、ここに、ちゃんと生きてる。